Setouchi Triennale 2022

観客を舞台の世界にいざなう
時空を超え 甦った舞台

瀬戸内仕事歌
Work songs of Setouchi &
四国最古の民話オペラ「二人奥方」

香川大学作品「瀬戸内の伝統生活文化・芸術発信プロジェクト」

古い暮らしの原風景と、半世紀ぶりに再演するオペラ。
四国村ミウゼアム・農村歌舞伎舞台で繰り広げられる
一期一会のインスタレーションに、客席が湧いた。

リスクを乗り越えて迎えた本番の感動

瀬戸内国際芸術祭2022春会期もいよいよ大詰めの5月15日、日曜日。前日までの雨も上がり、香川大学作品「瀬戸内の伝統生活文化・芸術発信プロジェクト」が本番の時を迎えました。

会場となった四国村ミウゼアムの農村歌舞伎舞台は、通常オペラを上演するホールと違い備品や音響、照明などの舞台設備がほとんどなく、前日から機材を持ち込んで設営に追われました。設備はすべて手動。あらゆるタイミングを人の手で合わせる確認作業や、特殊なプロジェクターの試写等、何度も現地で調整して本番に臨みました。

プログラムは「瀬戸内仕事歌」と四国民話オペラ「二人奥方」の二部構成で、昼の部・夜の部の2回公演。演者の声や音楽とともに、風薫る野外舞台ならではの木々の葉音や鳥の声、移り変わる空の風情までもが観客の五感と感性を刺激し、そこにいた人だけが共有できる極上のインスタレーションとなりました。芸術監督・演出の若井健司教授は「空間、環境、伝統的建築の価値、作品の面白さが見事に調和し、素晴らしい芸術感を生んだことに感動しました。瀬戸内の自然と先人たちの暮らしを感じる会場での公演は、出演者・観客・スタッフ全員が、タイムスリップしたような時間を共有できるものでした。過去に戻り考えることは、現代との比較。この地で生きた先人たちに想いを馳せ、生活環境の再認識に繋がりました。特に仕事歌が盛んに歌われた時代は、自然の恵みを活用した人力による産業（農業・漁業・林業など）が中心で、その労力は計り知れません。仕事歌はその重労働を支えた物の一つだと言えます。そして、農村歌舞伎舞台で行われた劇や歌舞伎、音曲などは、当時の産業を支えた先人たちの疲れを癒す娯楽であり、生活には欠かせないものだったと思います。今回の公演が先人たちを支えた芸術の価値を改めて見直す機会となったはずです。コロナ感染、悪天候等が心配されるなか、いろいろ苦労はありましたが、リスクを乗り越えた素晴らしい公演となりました」と振り返ります。

仕事歌の保存に取り組む各団体とは初のコラボレーション。「これをきっかけに世界に発信を」と意気込む出演者の皆さんは、客席がどよめくほどの迫力で自然の中で働く人の姿、そこから生まれる音を再現しました。オペラも野外劇場ならではの解放感にあふれ、観客はリラックスしていにしえの世界観に入り込めた様子。「会場の持つ雰囲気が気持ちを広げてくれたのかもしれませんね。観客が楽しそうで反応が良いと、演者のパフォーマンスも向上します」と若井教授。

生活の中から生まれた仕事歌は、感情表現とは別の目的を持つ「限界芸術」の一つです。一方、オペラは音楽性を追求する「芸術表現」。どちらも見応えにはまったく遜色なく、芸術祭総合ディレクターの北川フラムさんも「足は地に・目は世界へ、という芸術祭のコンセプトそのもの。こういうプロジェクトが見たかった」と絶賛。海外にも発信していける手応えをつかんだようです。

仕事歌は今回上演した以外にもたくさんあり、今後は四国村の各施設を舞台に建物にゆかりの深い仕事歌を上演するなど、さらに幅広く取り上げていく構想も。オペラは再演を望む声が大きく、広く伝えていけるよう学校教育の現場でも活用できるコンパクトな形に整えていきたいとのこと。

現在、若井教授はライフワークである瀬戸内源平絵巻オペラ三部作の完成を目指しているところ。「台本はほぼ完成しました。これまで三部作のオペラは日本にほとんど存在せず、どこまでやれるかの挑戦。今回『二人奥方』でオペラに興味を持った人たちに、親しんでもらえたらうれしいですね」

キャストも裏方も一丸となった大挑戦

「今回の成功は、多くの人のご協力とご理解の賜物です」と若井教授が語る通り、地域の様々な人たちや多くの大学関係者がプロジェクトをサポートしました。

第一部「瀬戸内仕事歌」で「石切り唄」「地つき唄」「東讃砂糖しめ唄」「仁尾網引き唄」「伊吹島舟唄」「讃岐麦打ち唄」「浜曳き唄」の7曲を披露したのは、「石切り唄保存会」「讃岐民謡保存会」「桑山会宇多津社中」の皆さん。昔の労働風景を演者が再現し、ラストの曲では、現代舞踊研究会「土曜族」が、「浜曳き」を表現しました。教育学部の古草敦史教授がフレスコ画風に描いた作業画を、昼公演は幕の早替えで、夜公演は映像で背景を表現しました。農村歌舞伎舞台が象徴する「昔ながらの手法」と、最新機器を使った「現代の手法」が融合した演出です。

7曲中5曲を担当した「讃岐民謡保存会」の山下利雄さんと智恵子さんは、保存会に参加して約40年。地域のお祭りや小学生向けの指導、四国民謡協会のコンクール、国民文化祭などで歌を披露してきました。香川の民謡のほか全国の有名曲を取り入れながら、日々技術を磨いています。

農村歌舞伎舞台は初めてでしたが、「仕事歌の世界に飛び込むきっかけとなった師匠から『ええ声を出すな、うまく歌おうとするな』と叩き込まれました」という利雄さんの素朴な声は、観客を一気に惹き込みました。「キラキラした目で真剣に取り組んでくれる大学生たちの姿に、私たちもフレッシュな気持ちを取り戻したように思います」。智恵子さんも「若い世代に興味を持ってもらい、今までの形にとらわれず地域にゆかりの深い歌を歌い継いでいけるよう、これからも学生さんたちと一緒に何かできればうれしい」と、今後への期待をにじませました。

第二部のオペラ「二人奥方」では、屋島中学校合唱部の生徒たちが巫子の装束に身を包んだ子ギツネ役で登場。普段は「みんなで合わせる」ことを重視する彼らにとって、「個性を出して1人で歌う」「演技をしながら歌う」のは大変な挑戦でした。練習期間は約2カ月、本番とテスト期間が重なり多忙を極める中、若井教授も演技や歌い方の指導に赴きました。

「歌詞の意味を掘り下げる合唱と違って、今回は「役柄」を深めるワークショップで、一人一人が自分の演じるキツネの性格や動きを具体的にイメージさせました。当初は目立つことを恥ずかしがっていた子も少しずつ積極的になって、表情が変わってきました」といいます。「1人で響きをふくらませつつ観客に伝える難しさを痛感しましたが、だんだん自分を出すのが楽しくなって、緊張しても声量が出るようになりました」と、3年生の中川遥稀さん。

「実際の衣装を着て一層役に入り込んだ姿は、お互いに新鮮でした」と語るのは、2年生の佐々木洸輔さん。「しっぽを付けた時は一番テンションが上がりました。本番は楽しくて、あっという間。失敗しても次を目指せるコンクールと違って、舞台の上で物語をつなげていく責任を学び、成長できたと思います」

香川大の学生たちも、様々な形でプロジェクトに関わっています。中学生が演じる子ギツネのメイクを担当したのは、創造工学部4年生の十川陽香さん。小学5年生の頃に農村歌舞伎に魅了され、現在も「農村歌舞伎 祇園座保存会」の一員として活躍中です。瀬戸内国際芸術祭2019の香川大学作品「トラと呼ばれたサル」でキャストを務めた経験も生かしつつ、今回は裏方を担当。昼公演を観て気づいたことを踏まえ「夜公演ではメイクの雰囲気を変えてみたい」と提案するなど、柔軟な対応力が光りました。

十川さんにとって農村歌舞伎は幼い頃から親しんできた世界ですが、オペラは新鮮なもの。「どんなコラボレーションになるのか想像もつかなかったけれど、見得の張り方やメイク・衣装などをうまく取り入れていて、驚くほど一体感がありました。前回の芸術祭に続いて、香川に農村歌舞伎文化が存在することを世界に発信する貴重な機会になったと感じています。農村歌舞伎に新しい要素を取り入れて盛り上げていく上で、オペラに触れたことは良い刺激。世界観を広げてもらいました」

教育学部4年生の金谷侑紀さんは、パンフレットに掲載する情報の取りまとめをサポート。今回のパンフレットには、仕事歌の保存に取り組む各団体をはじめ国会図書館、国立公文書館、地域の民俗資料館やミュージアムなどの協力も得て集めた膨大な情報を、今後も長く活用できる詳細な資料としてまとめる目的もありました。調べていくうちにどんどんページが分厚くなっていき、資料によって微妙に異なる歌詞のバージョンや表記に悩まされたことも。「でも、肉体労働時の疲れを吹き飛ばすほがらかな歌が多くて、楽しかったですね。リハーサルの時は観ている私もつい一緒に『どっこいしょ』と声が出たりしましたし、本番の臨場感は本当にすごかった」

金谷さんは文化の保存に興味を寄せており、「経済の発展に直結しない文化の保存は意味がないという人もいますが、一度失われた文化は二度と戻りません」と力を込めます。生活に根差した民俗を残していく点でも、今回のプロジェクトは大いに意義のある挑戦だったといえるでしょう。

瀬戸内仕事歌
Work songs of Setouchi &
四国最古の民話オペラ「二人奥方」

香川大学作品
「瀬戸内の伝統生活文化・芸術発信プロジェクト」

本番、ドキュメント動画、
パンフレット等を公開しています。

https://www.kagawa-u.ac.jp/cooperation-community/local/27076/28036/

詳しくは
こちらのQRから

教育学部 副学部長
若井 健司
わかい けんじ

香川県高松市出身。専門は声楽・音楽教育・地域芸術。テノール歌手。四国二期会理事長。東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。同大学大学院音楽研究科声楽専攻修了。2020年から現職。

伝え残したい想いを世界へ、未来へ！

この挑戦は、最初の一歩。
地域が誇る瀬戸内の伝統的生活文化を、
先人たちの想いと共に。